こんなところに
仏教用語

身近な仏教用語を紹介しています。

繋縛（けばく）

漢字からみても意味が十分に伝わってきませんか。「繋ぐ」と「縛る」で字の如く縛りつけるという意味です。世間では「けいばく」と読み仏教では「けばく」と読みます。古代インド語ではbandahanaと表記し、バンドの語源ともなっています。

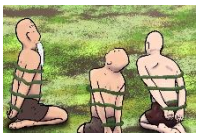
仏教では、迷いの輪廻を解脱することを目標とします。この解脱の対義語が「繋縛」なのです。我々は何かに縛られているから悩むのです。その何かとは煩悩です。ああしたい、こうしたい、こんなはずではなかった、これらすべて煩悩です。

親鸞聖人の師である法然聖人はこのような言葉を残されました。

悪業煩悩のきずなを断たずば、何ぞ生死繋縛の身を解脱する事を得んや。悲しきかな、悲しきかな。いかがせん、いかがせん

だからこそ阿弥陀仏は願われているのだから念仏を称えましょうと説かれました。

ちなみに「縛られて」という仏教紙芝居も作成しています。「西光寺チャンネル」で検索してください。



ミスは自分では気付けません 蓮乳

九品（ぼん）

「下品」、皆様は何と読みますか。「げひん」と読む方が多いかと思われます。仏教では「げぼん」と読みます。「げひん」と読みますと、品がない、汚いしぐさという意味で用いられます。

では、仏教ではいかがでしょうか。「品」とは古代インド語で、まとまり、種類という意味です。今期の初めの一歩で学び始めた『観無量寿経』の中で、極楽浄土に往生する人々を種類別に分けた場面があります。上品、中品、下品です。さらにそれぞれを上生、中生、下生にわけ、上品上生といったように九種類に分けられます。九品寺、九品の滝などはここが由来です。

上品、中品の人々は仏教の教えを守る人々です。下品の人々は、様々な悪行をする人々です。下品下生となりますと、仏教では最も重たい罪である五逆・十悪を行った人の事です。しかし、そこではじめて南無阿弥陀仏と念仏を称えることが説明されます。『観経』最後には、このお経の要は何ですかと問われた釈尊が「阿弥陀仏の名を保て、南無阿弥陀仏と称えよ」と言われます。

観無量寿経 法事用

親鸞聖人は、この念仏の教えに導かれました。今からでも遅くはありません。毎月十二日の初めの一歩で『観経』を学んでみませんか。